

SHOW HEY シネマルーム

★★★

タロウのバカ

2019年/日本映画
配給：東京テアトル/119分

2019（令和元）年9月15日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本・編集：大森立嗣

出演：YOSHI/菅田将暉/太賀
/奥野瑛太/植田紗々/豊
田エリー/國村隼/角谷藍
子/門矢勇生/荒巻全紀/
ACE/葵揚/水澤紳吾/
池内万作/伊達諒/中島朋
人/大谷麻衣/播田美保/
水上竜士/小林千里/原沢
侑高/伊藤佳範/大駱駝艦
/村松卓矢

■ショートコメント■

◆本作のチラシには、「自由。絶望。青春。焦燥。刹那。希望。」の文字が並び、「タロウ、エージ、スギオ。一瞬を永遠に生きようとする、まだ世界を知らない3人の少年。」の見出しが躍っている。そして、チラシでもホームページでも、次の解説がされている。すなわち、

「さよなら溪谷」「日日は好日」の大森立嗣が監督・脚本を手がけ、刹那的に生きる3人の少年の過激な日常を描いた青春ドラマ。主人公タロウ役には、本作が俳優デビューとなるモデルのYOSHIを抜てきし、タロウと行動をともにするエージを菅田将暉、スギオを仲野太賀がそれぞれ演じる。戸籍も持たず、一度も学校に通ったことのない少年タロウには、エージとスギオという高校生の仲間がいる。エージとスギオはそれぞれ悩みを抱えていたが、タロウとつるんでいる時だけはなぜか心を解き放たれるのだった。空虚なほどだっ広い町をあてどなく走り回り、その奔放な日々により自由を感じる3人だったが、偶然にも1丁の拳銃を手に入れたことから、それまで目を背けてきた過酷な現実に向き合うこととなる。

ところが、そんな“青春ドラマ”がR15+に指定されているから、アレレ……。そりゃ一体なぜ？

◆事件でも人間でも、すべてに表と裏があるのは当然。したがって、本作の主人公になる3人の若者をどう見るかについても、大森立嗣監督のように表から見ることは可能だが、私のように裏から見れば……？

本作では、まさにこの3人は思うがままに生き、他者の立場（迷惑）など何も考えていないようだが、それでは困る。そのため人間社会には、法律、刑罰、警察がある。しかし、本作には一切それが登場せず、あくまで3人の若者の視点のみが強調されている。しかし、

それでいいの・・・？

◆若者はエネルギーがあり、行動力に満ちあふれているが、未熟なもの。そのため、『ロミオとジュリエット』(96年)のような悲劇も起こすし、『ウエスト・サイド物語』(61年)のようなバカげたケンカで命を落としてしまうこともある。本作ではスギオ(太賀)の中途半端さが際立っている分だけ、最も若いタロウの無知と狂気が際立っている。しかし、世の中にこんな男を一人前の人権を持った人間として同居させていいの？

ちなみに、タロウは戸籍もなく一度も学校に通ったことがない少年という設定だが、8月11日に観た『存在のない子供たち』(18年)を生んだ国レバノンやアフリカの某国ならともかく、今の日本でそんなことがあり得るの？タロウのような、およそ人間とは思えない凶気(＝狂気)の存在が人間社会の中に紛れ込まれたのでは迷惑千万。そうならないために法律があり、警察があるはずだが・・・。

◆本作については、新聞紙評はいろいろとカッコいい評論がされている。しかし、私はそれらを読んでウンザリ。また、本作を観ていると後半からはいちいち反論したくなったし、鑑賞放棄までしたくなった。それほど本作について私は反感ばかりだったが、さて、あなたは・・・？

2019(令和元)年9月18日記